

# プロティノスと倫理的自然主義 『エネアデス』第一エネアス第四論文1章～4章

坂本 知 宏\*

Plotinus and ethical naturalism : *Enneades* I.4.1-4

Tomohiro SAKAMOTO\*

## Abstract

Nowadays many scholars do research in virtue ethics. The ethical stance of Plotinus in later antiquity is to be counted to be one of it, whose central concept is eudaimonia (happiness or human flourishing). *Enneades* I.4 has the title 'On Happiness'. Its themes are important practical problems on how we can live well and what happiness is. In 4.1-4 Plotinus' fundamental position is established through the criticism to Aristotle, Epicureans, and Stoics. We can understand 4.1-2 well if we consider it as the criticism to the naturalism in various positions. In 4.2 the cause of happiness is proposed to be sensation, pleasure, and logos, all of which turn to be defective. 4.3 begins by building Plotinus' own position in which happiness is not simple life (haplos zoe), nor sensational life (aisthetike zoe), nor (the Stoic version of) logical life (logike zoe), but life in fullness (agan zen). 4.4 describes the life of truly happy man, who is one with Intelligence the Substance and contented in all. His mode of life is highly metaphysical, religious and mystical.

## はじめに

プロティノス『エネアデス』Iの第四論文「幸福について」では、「われわれがいかにしてよく生きることができるか」「幸福とは何か」という、重要な実践的問題が扱われている。

第四論文「幸福について」(I.4)は、1～4章と、5～16章の二つの部分に分けられる。1～4章では、プロティノスの基本的立場が、アリストテレス、エピクロス派、ストア派といった他の立場への批判的検討を通じて、確立される。5～16章では、その基本的立場の様々な倫理的問題への適用が、問答形式で語られる。全体を見渡すと、そこで語られるテーマは様々である。たとえば、外的事物 v.s. 魂 / 理性、外的人間 v.s. 内的人間といった対立について、魂 / 理

---

\*大阪電気通信大学 人間科学研究センター

性 / 内面 を重視すべきこと、また悲運に見舞われた有得な人物について、(内面重視のゆえ) 有得な人物は悲運に見舞われようと幸福であることなどが語られている。だが小論ではこれらのことは扱わない。これらは、プロティノスの基本的立場から出てくる系に過ぎない、と言えるかもしれない。小論が扱うのはプロティノスの立場そのものであり、プロティノスの立場が他の立場の批判を通じて確立されていく過程であり、その過程において示されている自然と超自然の対立関係である。従って小論では1～4章が検討される。

では、なぜ「自然と超自然」をテーマとして選ぶのか。上で述べたとおり、一つにはもちろん、いかに生きるべきかという根本問題が重要であり、I.4は「よく生きること」「我々の生のよき在り処はどこか」について述べたものであり、中でも1～4章がプロティノスの基本的立場が確立される箇所であり、その際「自然と超自然」というテーマが現れているからである。だが、それだけではない。

そもそも、本当にそうしたテーマが1～4章に現れているのか、また現れているとしてもそれがどのような重要性を、現代の哲学 / 哲学史研究者であるわれわれにとってもつのか、と問う人もいよう。この問いには次のように答えることができるだろう。「自然と超自然 / 反自然」(これは「経験とプラトン主義の対立」と言い換え可能である) というテーマは、哲学の根本問題の一つである、形而上学という自然を超えたものを扱う学、それこそが哲学だ、と。

とはいえ、「自然」「自然主義」という言葉は、あまりに大きな言葉であり、「自然と超自然」もあまりに大きなテーマである。私はこのテーマを、倫理学という土俵で検討したい。I.4は「幸福について」というタイトルを持つ、倫理的領域の論文である。倫理的な自然主義が、そこで提出され批判されプロティノスの立場が確立される、と私は考える。プロティノスの立場は、徳の倫理学 (virtue ethics) の一つに数えてしかるべきだ、とも考える。

徳倫理学は、現代倫理学の二つの主要な立場である功利主義とカント主義の批判を通じて、第三の立場として近年精神的に研究されつつある立場である。その最も大きな源泉はアリストテレスである。現代の理論もそのリバイバルとして捉えられているし、現代の理論家の多くにとってインスピレーションの源はアリストテレスである。

私がプロティノスのI.4を論じてみようと思ったのは、次のようなことを考えたからである。古代後期のプロティノスの倫理学上の立場も、幸福 (エウダイモニア eudaimonia) 概念を中心に展開される、徳倫理学の一つと考えることができる。だが、自然主義に親和的な、自然主義的解釈の可能なアリストテレスと異なり、プロティノスの「徳倫理学」は形而上学的 / 超自然的な徳倫理学である。そうした立場は現代ではあまり見当たらない<sup>1)</sup>。ならばプロティノスの立場を検討し、プロティノスによる「徳倫理学」のあり方、ひとつのかたちを大きくとらえることができれば、自然主義に立って徳倫理学を構築しようとする現代の論者たちによる理論とは違った理論のあり方の可能性を考える際のモデルとしてプロティノスの立場を用いることもできるかもしれない。そこで、プロティノスという高度に形而上学的 (だと考えられている) 哲学者による、われわれの生と幸福をめぐる思考を「徳倫理学」として捉えた上で、自然主義に対する批判をテキストに即して詳しく検討してみたい、と考えたわけである。

以下の論述では、上記のような目論見、見込をもって、第四論文を1章から4章まで順に検討してゆきたい。

## 1 第四論文1章(4.1):自然主義とその批判

本章では、4.1. において自然主義が問題となっていることを示したい。様々な立場の「自然主義」的なところがプロティノスによって批判されていると考えると、4.1-2 がよく理解できるのではないか。しかしながら、その前に、倫理学における用語である「自然主義」を簡単に確認しておきたい。

自然主義者は、道徳的判断が真や偽でありうるし、知られうる、と考える。また、善や正が他の特性(幸福や、神の意志など)と同一視できる、もしくはそれに還元できるとする。また善を感覚経験起源の観念により定義可能だと考える。〈「よい」という語は、人間について言う時にだけ意味を変えらるゝとは考え難い〉という言語哲学的洞察が、倫理的自然主義の一つの支えだ、と考える現代の徳倫理学者もいる。また、「人間本性」の考察に基づいて倫理学を行うだけでなく、人間を、生き物の自然で生物(学)的な秩序の一部として捉えることが多い<sup>2)</sup>。

4.1についての概略を知るため、アームストロングによる簡明な要約を拝借する。(とはいえ、I.4の新しい注釈書<sup>3)</sup>では、プロティノスのここでの標的はアリストテレスだけでなく、エピクロス派とストア派もそうであると、論じている。)

もしよい生がつねに、アリストテレスの考えるように、自らの適切な機能を果たすことと、自らの自然な目的を獲得することにあるなら、(植物を含む)他の生きものによき生を否認することはできない<sup>4)</sup>。

この要約においては、自然主義者であるのはアリストテレスとされている。アリストテレスの自然主義は「自らの適切な機能」や「自らの自然な目的」といった、自然主義、目的論の用語によって表現されている。

確かに、1章には自然主義の発想が豊富に提出されている。というよりも、プロティノスは終始、自然主義の立場に立って論じながら、植物に幸福が認められないなんておかしいではないか、と述べている<sup>5)</sup>。だが、プロティノスは植物に幸福を認めはしない(3.17-24, 14.4-8)。つまり彼は、自然主義の考え方のままでは植物にまで幸福を認めるというおかしい結果を受け入れざるをえないと指摘しているのである。

4.1では、上に述べたように、「機能の活動=幸福」というアリストテレスの主張を推し進めるなら、植物にまで幸福を認めざるを得ないが、それはおかしいとプロティノスは指摘し、また4.2では、植物が感覚を持っていないことを理由にアリストテレスも植物に幸福を認めないけれども、これも議論としてうまく成立していない、と批判している。つまり、4.1も4.2も帰謬法的議論により、アリストテレスの自然主義が批判されているのである。

次の引用には、自然主義の発想が見事に表現されている。

しかし、植物に生きること(to zen)をも認める限りは、幸福を与える人もいよう。そして、よい生もあればその逆の生もある。例えば植物にもよい経験をする / しない(eupathein kai me (to be well or badly off よい状態である / ない))ことが可能だし、実を結ぶ / 結ばないことができる。(第四論文1章23行~26行[=4.1.23-26])

すると、実を結ぶ木はよい木であり、よく生きている木であり、そうでないのはその逆の木であるということになる。

ところで、現代の徳倫理学者ハーストハウスは、われわれが植物個体を、二つの目的（個体の生存、種の保存）との関係で二つの面（部分と働き parts and operations）を評価する、と述べている。彼女は次のように定式化する。

よいxとは、その部分と働きの点でよく適合している、または恵まれているようなxである。よく適合している、または恵まれているかどうかは、その部分と働きが、複数のxに特徴的な仕方ですべてその個体的生存と種の存続に役立つかどうかによって決まる。

**A good x is one that is well fitted or endowed with respect to its parts and operations; whether it is thus well fitted or endowed is determined by whether its parts and operations serve its individual survival and the continuance of its species well, in the way characteristic of xs.**<sup>6)</sup>

すると、ある植物は、その諸部分とその生命活動とが、その植物個体の生存と、その個体が属する種の存続とに役立つなら、よい植物である。実を結ぶべく適切に生命活動を繰り返した木は、実を結ぶことでその植物種の存続に貢献する点で、よいと評価される。プロティノスが、4.1.24 – 6 で述べているのは、まさにこのことである。またさらに、「適切な生命活動」ということばに対応する句も、プロティノスの4.1のテキストに現れている。eupathein (line 7), en to(i) kata phusin ergo(i) einai (lines 7-8)が、そうした語句である。このように、4.1 では、批判的議論の一部としてはあるが、自然主義の考え方が提示されているのである。

4.1に見られる自然主義的な倫理的立場と似たような立場は、現代でも存在している。古典的功利主義は快楽主義的倫理学理論である。さて快楽（ヘドネー hedone）を幸福と考える立場が1章に登場し、2章でも扱われる。エピクロス派の立場である。また、功利主義は目的論的倫理学とか結果論的理論だとされるが、目的（テロス telos）は1章のキーワードの一つである。4.1.10 – 15 は目的論（telos）と自然主義（phusis）との自然なつながりをわれわれに教えてくれる。

またそうすると、もしわれわれが「幸福であること（ト・エウダイモネイン to eudaimonein）」をある目的（ティ・テロス ti telos）としても、すなわち自然における（エン・ピュセイ en phusei）欲求の終極であるところのものとしても、そのようにしてもそれら他の生きものが終極に達するならそれらに「幸福であること」を分け与えるだろう。すなわちその終極に達する時には、そうした生きものにおける自然（ピュシス phusis）がそれらの生のすべてを踏破し、はじめから終わり（テロス telos）まで満たしたのだから。

**Then again, suppose we make well-being an end, that is, the ultimate term of natural desire; we shall still have to allow other living things a share in well-being when they reach their final state, that where, when they come to it, the nature in them rests, since it has passed through their whole life and fulfilled it from beginning to end. (Armstrong 訳)**

このように、1章に現れている自然主義の発想のキーワードとなっているのは、ピュシス（自然、

phusis)、エウパテイア (eupatheia)、テロス (telos)、ゼーン (zen) 等である。ある生きものは、それが属する種の一員として適切な機能 (エルゴン ergon) を果たすことによって、よいと評価される。その時その生きものはよい経験をもつ (エウパテイン eupathein)。種の一員としての適切な機能は、その種の目的 (テロス telos) に対応する。そしてその生きものは、適切な機能を果たし、よい経験をもち、その目的を達成するなら、よく生きる (エウ・ゼーン eu zen) と言われ得るものなのである。

## 2 第四論文2章 (4.2)

2章 (4.2) は1章に続いてアリストテレスの批判を行っているが、その議論は1章とは異なっている。アリストテレスは人間以外の生きものは観照 (テオリア theoria) に与らないから、幸福でないと言っている<sup>7)</sup>。彼は幸福 (エウダイモニア eudaimonia) を特に人間のものと見なしているのに、すべての生きものにも当てはまるような言い方で幸福を定義するところを、プロティノスは批判している (アームストロングによる要約参照)。4.2は植物は感覚をもたないから幸福ではないとする説の検討から始まっている (アリストテレスはこの説の提唱者とされる)。アームストロングによれば4.2のあらすじは次の通りである。

よき生が快を感じることやアタラクシア (tranquility) すなわち特定種類の意識経験にあるとするエピクロス派も吟味に耐えない。よき生は理性的生にあるとするストア派の立場は真実に近いが、しかし、「第一義的な自然的必要」という彼らの説は話を混乱させている<sup>8)</sup>。

少し解説すると、幸福の原因・候補として感覚、快、ロゴスが挙げられていく。幸福をこれらのそれぞれに求める立場が述べられ、批判されていくわけである。(この感覚 (アイステーシス aisthesis) → 快 (ヘードネー hedone) → ロゴス (logos) への移り変わりはとても自然なもので、思考がスムーズに流れてゆくさまは一種美しいものがある。) 何れの立場も幸福を、こころの状態 / 活動・働きに見ようとする。「幸福は感覚にあり」という説 (「感覚説」と呼ぼう) は、帰謬法により退けられる (4.2.1 - 31)。感覚はしかし、外の情報を取り入れる、生きものこのころの働きとしてとても重要である。感覚が何を意味するか、四つ候補が挙げられ、いずれの場合も不条理へと導かれ、従って幸福は感覚にない、とされるわけである。その際「幸福=感覚」が意味するものの候補として、経験 (パトス) に気づくこと、快 (ヘードネー) が登場する。パトスは外の情報をとらえる働き・作用というより、その結果として引き起こされたこころの情態と考えられているようである。そしてまたこのパトス、経験、一般に感覚に幸福 / 善を求めるのは、自然主義の考え方であると理解できるのである。

4.2.1 - 31 (アリストテレス、エピクロス派への批判) の結論部分を引用する。

だが、植物に幸福を認めない人々と、それを特定の (これこれのような) 感覚にあるとする人々とは、自分たちが知らないうちに、よく生きることを何かより大きなものとして捜していて、それをよりよいものとして、より透明な生のうちにあるとしているようだ。 4.2.28 - 31

生命というもの、生の観点からすると、植物に幸福を認めないのはおかしい。プロティノスも生

命主義に立つ。ただしプロティノスの場合、生に段階がある。したがって、植物には結局のところ幸福は否定されなければならない。

上の引用に続けて、理性的生（ロギケー・ゾーエー logike zoe）に幸福を見る人々（ストア派）が登場する箇所が続く。彼等は（アリストテレスのように）幸福を機能に見る考え方のような「ただの生（ハプロース・ゾーエー haplos zoe(i))」（32行）でなく、エピクロス派のように「感覚的な生（アイステーティケー・ゾーエー aesthetike (zoe)）」（33行）でなく、「理性的生」に幸福があるとす（「ロゴス説」と呼ぼう）。プロティノスは、この説は正しいけれども、ロゴスのどこに尊ぶべきものがあるためか、と議論を提出する。「第一義的自然的必要 ta prota kata phusin」（37行）を見つけ獲得するのに長けていることを理由にロゴスが尊ばれるなら、ロゴスがそれ自身で尊ばれるわけではなくなる。そうでなく、それ自身で好まれるのなら、ロゴスの本性を述べなければならない。しかし、ストア派にはロゴスが「尊ばれるのはいかにしてかを言うことができない。」（4.2.51-52）彼らがもう少しましなことを言えるようになるまでほって置こうとプロティノスが言って、4.2.は終わる。

この「ロゴス説」についても、上の「機能説」（4.1）、「感覚説」（4.2）と同じく、その自然主義が批判されている。先に引用した 4.2.28-31 は、自然主義的主張である「機能説」と「感覚説」について、そうした説を唱える人々はよく分かっていないながらも実は「よく生きること」を「なにかより大きなもの」だし「よりよいもの」だし「より透明な生のうちにある」としている、と述べていた。これは、どちらの説も自然主義的レベルに留まっている点への批判であると考えることができる。この点で「ロゴス説」も同様である。「ロゴス説」はロゴス解釈として、いわば「道具的理性」と言えるようなものを提出して、それで満足している。いやむしろ、理性（ロゴス logos）は「召使い（hupourgos）」となると言われている（4.2.41）から、「道具的理性」ならぬ「召使的理性」という理性解釈と呼んだ方が、ここではより適切かもしれない。これは、理性の自然主義的解釈である。また、その召使的理性が使える主人は、「第一義的な自然的必要（タ・プロータ・カタ・ピュシン ta prota kata phusin）」であり、これまた自然的なものである。つまり理性より大事なものは自然的なものとされているのである。このことから、ここでなされたロゴス解釈にもとづいた「ロゴス説」は自然主義的だと結論できる。

以上、4.1-2 は、プロティノスによる、先行者哲学者たちの、幸福についての考え方への批判である。

### 3 第四論文3章（4.3）「ロゴスの生」とは何か

3章からプロティノス独自の立場の確立という仕事が本格的に始まる。まず「幸福は生のうちにある」（4.3.2）という想定を立てた上で、「生きること」がすべての生きものに対して同じ意味で適用されるならどうなるかをプロティノスは追及する。その場合、すべての生きものが幸福を入手できること、すべての生きものが入手できるものがありそれを備えた生きものはよく生きていること、の二つを認めること、ならびに、理性的な生きものはよく生きることができるが理性をもたない生きものはそうではないという説を認めることができないこと、以上のことが生じてしまう、と彼は言う（4.3.3-7）。従って「理性的生が幸福だ」とするストア派の立場が取られる。「すべての生きものは幸福でありうる」（4.3.3-4）ということに耐えられず、やはり人間のみに

幸福を与えようとしてである。だが、その時ストア派は、理性的生という、ある特定種類の生に幸福があるとすると、幸福が生一般にないと言っていることになる。これは、「生という語は、すべての生きものと同じ意味で用いられる」と想定した場合の、つまり逆に言えば後でプロティノスが採用する「生の段階説」を想定しない場合の、「幸福は理性的生にある」（理性説）の不条理である。従って「生の段階説」をストア派も認めなくてはならない。

ストア派にとって幸福は「理性的生」という「この全体 to holon touto」（4.3.15）に依存しているが、「理性的生」はただの生ではなく、ある種の生 *allo eidos zoes*（4.3.16）であり、（ただの生、植物的生、感覚的生とは）「別種類の生」「生の別の形」なのである。（ここで別種と言うのは、論理的区別でなく、形而上学的区別である。cf. 4.3.23-4）こうして生にはいろいろな生があることが、ストア派の言語に基づいて論証されたわけである。

「生の段階説」は次のように表現されている。

したがって、生は多くの仕方でも語られるし、第一、第二、その次のものに応じて異なりをもち、同じように「生きること」はある仕方では植物に、別の仕方では非理性的[動物]に語られ、その時のいろいろな「生きること」は透明性と不透明性の点で異なっており、「よく生きること to eu (zen)」も、それに対応している異なるものがある。4.3.18-23

そして、「幸福は充実して生きること *agan zen* にある」と主張する。「豊かな、充実した、溢れんばかりの生」が幸福なのである。そのような生は、「かの知性的実在にある」。

このようにして幸福は、ただの生でなく、感覚的生でなく、理性的生（のストア派バージョン）でなく、「豊かな、充実した、溢れんばかりの生」にあることになった。

ところで、現代の自然主義者にしても人間の理性能力が人間本性の重要部分を占めることは認める。アリストテレスにしても、テオリア（観照 *theoria*）の生が、結局、人間的に幸福な生である。もちろんストア派も、批判されるもの、理性的生が幸福だと述べていた。皆、理性が人間の特徴であることは認めるのである。その内容はそれぞれ異なり、それに応じて幸福も異なる、と言える。今見たように、プロティノスのロゴスは高度に形而上学的である。

自然主義者も人間のうちに理性があることを人間本性の第一の特徴として認める。人間が理性的であるということに対応する目的としては、伝統的には、「魂が死後の生に備えること *the preparation of our souls for the life hereafter*」と、「観照(理論理性がよく機能すること) *contemplation (the good functioning of the theoretical intellect)*」が考えられてきた、とハーストハウスは言っている<sup>9)</sup>。プロティノスは或る意味でまさにこの伝統的な考えを採用していた。いやむしろ彼はその伝統を継承・再形成し、大きな影響を後世に与え、それが今では伝統的なものと捉えられているのだろう。

#### 4 第四論文4章（4.4） 理性

人間にとっての幸福な生が本当はどのようなものが述べられる4.4を検討しよう。人間にはどのような仕方でも幸福であることができるのか(4.4.5)。

プロティノスは次のように述べる。

……人間が完全な生を(テイレイアン・ゾーエーン teleian zoen) もつのは、感覚的生(テーン・アイステーティケーン ten aesthetiken) だけでなく、理性(ログスモン logismon) と真の知性を(ヌーン・アレーティノン noun alethinon) もつことによってである……。4.4.6-8

ストア派と同じくプロティノスの考える幸福も理性的生である。その知性のあり方は、また、真の幸福の姿はどのようなものか。

まず、知性をもつ幸福な人は知性と一体化していることが述べられる(4.4.8-15)。そして現実的に知性をもつ人は、「自分自身にとってまさに彼がもつもの(=善)」である(4.4.7-19)。ただこの善が善であるのは、すなわち彼が幸福であり善であるという時の善の意味は、「彼方の善(ト・エペケイナト……epekeina)」(4.4.19) が善であるという時の意味と異なることを、プロティノスは注記している(4.4.19-20)。

更に、幸福な人の生は、すべて満ち足りている(*autarkes*)。彼にはすでに最善(ト・アリストン *to ariston*、4.4.22. *toi de aristoi*)が備わっているから、他に求める必要がないからである。彼はしかし、身体が必要なものを求めるが、身体は彼自身が望んだわけでもないのに彼に結び付けられているものにすぎず、本当の意味で彼その人とは言えない(4.4.25-30)。「そして以上のようなわけだから(*toinun*)、彼は、逆境にあっても幸福であることに関して、少なくなるということもない」(4.4.30-31)。そして、身内や友人の死も真の彼に苦痛を与えない、と言われて4章は終わっている。

以上から浮かび上がる知性と、知性となった幸福な人の生のあり方は高度に形而上学的であり、いくぶん宗教的で、神秘主義的なところもある。形而上学的だというのは、4.4.9-11で「知性」が人間のもつもしくは与るものとして措定されている点や、4.4.9-20で「彼方の善」が幸福な人の善の原因であるとされている点、また4.4.25-26や4.4.34-6で「真の自己とそれを取りまく身体」という(アームストロングの命名では)「二重の自己」の心理学(*double self psychology*)が前提されている点などである。これはプロティノスという高度に形而上学的な哲学者に関しては当然予想されることかもしれない。

おわりに

以上、第四論文1章～4章を検討してきた。その結果、幾つかのことが明らかになった。第一に、倫理学上の主要な立場の幾つかが、特に自然主義的なそれらが、I. 1.1-4 に登場し、批判されている。第二に、ロゴスの生が人間的善 / 幸福だということは、ほとんど誰もが認めている。第三に、プロティノスの倫理学的立場は、高度に形而上学的なもので、宗教的とさえ言える。

(小論は、平成14年9月に新プラトン主義協会で行った研究発表「プロティノスと倫理的な自然主義」に基づいている。)



## 註

- 1) Murdoch, *MGM*は例外と言える。ただし、彼女の立場が徳倫理学に数えられるかはわたしにはわからない。
- 2) Hursthouse *VE*,206 参照。「人間における善の基準は、人間が何であるか、何をするかに関係していなければならない」
- 3) McGroarty, p. 40.
- 4) Armstrong, p.168.
- 5) 4.1の最初の文は「〈よく生きること〉と〈幸福であること〉を同じとするなら、われわれは他の生きものにもはたしてそれを分け与えるだろうか」であり、最後の文は「たまたもし〈自然に従って生きること〉を〈よく生きること〉であると言っても、そうである [=他の生きものから〈よく生きること〉を奪う人は、馬鹿げている]」である。
- 6) *VE*, p.198
- 7) Armstrong, p.173, note 3, *Ar.,EN*, 1178b28
- 8) Armstrong, p.198
- 9) *VE.*, p.218.

## 参考文献

- Armstrong, A.H. (ed), *Plotinus*, 7 vols., Loeb Classical Library, Harvard University Press, 1966-89.  
(4.1「幸福について」は第1巻に所収) [Armstrong]
- Hursthouse, Rosalind, *On Virtue Ethics*, Oxford University Press, 1999 [VE]
- McGroarty, Kieran, *Plotinus on Eudaimonia : A Commentary on Ennead I. 4*, Translation and Commentary, Oxford University Press, 2006 [McGroarty]
- Murdoch, Iris, *Metaphysics as a Guide to Morals*, Penguin Books, 1992, [MGM]

